

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：32304

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04238

研究課題名（和文）参加型評価アプローチによる若者早期支援プログラムの開発に関する研究

研究課題名（英文）Research on the development of youth support programs using a participatory evaluation approach

研究代表者

藤島 薫（FUJISHIMA, KAORU）

東京福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：90530121

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000 円

研究成果の概要（和文）：ACT for Youthにおける若者参加型評価、フィンランドの対話実践、家族会の参加型評価などの実践から、参加型評価アプローチが若者支援に有効であるかについて、多くの示唆を得ることができた。大人が若者を理解しようとするのではなく、若者を信頼して若者を評価の主体者として位置付けるという姿勢の重要性を理解することができた。また、参加型評価のベースとなっている対話は、お互いの声を尊重しあうということで成立するものであり、いかにして安心の場を設定できるかが鍵である。今後は、評価プロセスに若者が主体的に参加できる取組みを実施し、評価プロセスに参加したことによる変容を分析し効果検証を行いたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

若者が抱える課題として不登校、ひきこもり、対人関係などがあり、様々な支援プログラムが存在する。支援アプローチの多くは若者の主体性を推進しているが、どのように主体性を尊重するのかという具体的プロセスを明示しているものは十分ではない。

参加型評価は問題についてのアセスメントから実施計画と分析評価までのプロセスに当事者が参加するというものである。対話をベースとした参加型評価アプローチに基づく若者支援が実施されることにより、日本社会が抱えている引きこもり問題等の解決に役立つことが期待される。

研究成果の概要（英文）：Practices such as youth participatory evaluation in ACT for Youth, Dialogue practices in Finland, and participatory evaluation in family associations provided many insights into the effectiveness of participatory evaluation approaches in supporting youth. We were able to understand the importance of an attitude in which adults do not try to understand young people, but rather trust young people and position them as the main actors in the evaluation. In addition, dialogue, which is the basis of participatory evaluation, is based on mutual respect for each other's voice, and the key is how to set up a place where they feel safe. In the future, we would like to implement measures to enable young people to proactively participate in the evaluation process, and analyze the changes that occur as a result of their participation in the evaluation process to verify its effectiveness.

研究分野：社会福祉

キーワード：若者支援 参加型評価 対話 若者主体

1．研究開始当初の背景

（1）問題の所在

思春期・青年期の若者はその成長過程において心身の不調や不安定さを受けやすく精神疾患発祥の好発年齢であるが、多くの若者は友達との関わり、学校生活や社会活動など様々な体験を通して葛藤しながらも安定した大人へと成長していく。しかし、ストレス脆弱性やいじめ、虐待、コミュニケーションの課題などから不登校、ひきこもり、精神病様症状などにより社会参加が困難となる若者も少なくない。社会参加の困難さはさらに自尊感情の低下に連動し悪循環に陥ることとなる。不安定な年代における大人や支援者の関わりは慎重さが求められるが、若者が本来持っている力を若者自身で見つけ自信を高めていくような支援が重要である。

（2）研究代表者の研究状況

以上のような問題意識から、「青年期における精神疾患早期支援プログラム開発（挑戦的萌芽、平成 21 - 22）」、「精神疾患早期支援のための思春期・青年期過渡的プログラム開発に関する研究（基盤 C、平成 23 - 25）」、「若者と家族のストレングスに焦点をあてた早期支援過渡的プログラム開発に関する研究（基盤 C、平成 26 - 28）」と研究を進展させてきた。その結果、不適応状態の問題と原因の因果関係に焦点をあてる問題志向アプローチよりも、自分が望む未来の姿に焦点をあて、そのために役立つ自分と環境のストレングスを見つけていくアプローチが効果的であるという示唆を得ることができた。そのためには、若者との平場の関係に基づき若者の声に耳を傾ける対話が重要なキーワードとなり、主体的な参加性が大切となる。

参加型評価は、当事者や家族、支援者などの関係者が評価プロセスに参加する評価アプローチの 1 つであり、平場の対話をベースとしたものである。評価プロセスの活用（Process Use）を通して、当事者意識、責任感、関係者同士の相互理解、評価対象への理解を深めることから、エンパワメントの促進と事業（プログラム）改善が期待される。本研究の着想は、若者自身を若者支援プログラムの参加者（主体者）として位置付けることであり、そのために対話をベースとした参加型評価アプローチを活用していくものである。

2．研究の目的

（1）研究の目的

本研究の目的は、メンタルヘルス等の課題によって社会参加に困難を抱えている若者が自分自身でストレングスを発見しリカバリーを促進する「参加型評価アプローチによる若者早期支援プログラム」の開発である。若者自身がプログラムの主体者として参加することによりエンパワメントされ自信を回復していくことを目指す。

（2）具体的達成目標

まず、参加型評価アプローチをベースとした若者支援プログラムの先行事例について調査しまとめる。また、若者の声を尊重するために重要となる対話（ダイアログ）について先行研究および事例をまとめる。次に、実際に若者支援関係者（家族、支援者など）の活動について参加型評価を実施し評価指標やロジックモデル作成におけるプロセス活用について分析を行う。当初の最終目標は、若者による参加型評価プログラムを実施しその効果について検証することであったが、社会情勢（新型コロナウイルス感染）と研究機関との関係（1 年間休職等）により、最終目標は今後の課題として残された。

3．研究の方法

（1）参加型評価アプローチをベースとした若者支援プログラムの実施調査

アメリカニューヨーク州で行われている若者参加型評価（Youth Participatory Evaluation：YPE）の概要と実際および関連事例について訪問調査を行った。訪問先はコーネル大学の研究機関 BCTR に設置されている ACT for Youth を中心に、プロジェクト 2 Gem、4 - H プログラム、PRIDE students、Cornell Office for Research on Evaluation、及び、若者参加型評価のアウトリーチプロジェクトである The Learning Web である。調査期間は 2019 年 3 月 12 日～13 日の 2 日間である。

（2）対話（ダイアログ）活用事例の実施調査

フィンランドの精神医療から始まった対話（オープンダイアログ）の活用事例の実際について訪問調査を行った。訪問先はダイアログによるスーパービジョンを行っている Dialogic、Meriva SR、ケミ市クライシスセンター、Good will、ロヴァニエミ行政機関、コトカ市保育園、コトカ市役所、その他、ダイアログ創始者のトムアンキル氏、カリヴァルタネン氏、解決志向アプローチのベンファーマン氏などと意見交換。調査期間は 2024 年 3 月 17 日～3 月 26 日。

（3）若者支援関係者の参加型評価

ひきこもりの子どもを持つ家族会である「マロウドの会」の参加型評価を実施。本会は家族会と同時進行で当事者会「まどべ倶楽部」も運営していた実績があり依頼した。

第 1 回参加型評価は 2022 年 2 月 20 日、第 2 回参加型評価は 2024 年 2 月 18 日。

4. 研究成果

(1) 参加型評価アプローチをベースとした若者支援プログラムの実施調査

BCTR について

BCTR は 50 年以上に渡りコーネル大学で教鞭を取った発達心理学の分野で著名な Urie Bronfenbrenner 博士の功績を記念して名付けられた。エコロジカル・システム理論を提唱し人間の健康と幸福は文化的、社会的、経済的、政治的要素を含みその交互作用によって実現することができると述べ、理論とそれに対応する研究、理論と実行の探求そして応用と、研究と実践の関連を重視し、その信念は現在に受け継がれている。研究プロセスに複数の利害関係者 - 研究者、実務者、コミュニティメンバー、政策立案者 - を様々な組み合わせで結び付け、より良い研究、ポリシー、プログラム、実践を実現していくことを目的としており様々なプロジェクトが展開されている。実施されたプロジェクトの調査結果はより実践的なものとしてコミュニティプログラムに組み込まれ、得られた評価結果は現実社会におけるフィードバックとして次に発展させていくこととなる (BCTR: 2019)。研究者とコミュニティの間には生きた対話が継続的に行われていき、まさに、BCRT は参加型評価をベースとした研究センターであると言えることができる。以下は、その中で、本研究目的のために訪問したプロジェクトの調査結果である。

YPE (若者参加型評価) と実践事例

ACT for Youth における YPE (若者参加型評価)

ACT for Youth はニューヨーク州保健省の支援によりいくつかの機関のパートナーシップで実施されているもので、コーネル大学の BCRT がその中心的役割を担っている。ポジティブな青少年育成のために地域が若者と協力し発達に豊かな環境を整備すること、コミュニティ活動のプログラムや組織活動に関与し、YPE の原則に基づいた若者参加型評価を実施し、若者の社会的能力や関係構築、自己肯定感の向上、アイデンティティの確立、若者支援プログラムと組織に対しての利益など多くの成果を出している。YPE の原則とは次の 7 点である。 評価への参加者を変える、 若者のエンパワメントを促進 (若者の経験と知識)、 相互に開放的なパートナーシップ (若者 若者、若者 大人)、 若者と大人の対等な関係 (若者の意思決定とリーダーシップ)、 民主的リーダーシップによるプロセス、 全ての段階に若者が意味ある参加 (問題定義、情報収集、分析、意思決定、行動)、 継続的プロセス (地域社会の改善に不可欠である研究と評価)。また、YPE は若者が評価プロセスにどのように参加するのかによって「最高」から「なし」までに分類されている (ACT for Youth:2019) (表 1)。

表 1. 評価・調査における若者参加度による参加過程

若者の参加度	参加の過程
最も高い Highest	若者主導の評価及び調査は組織計画サイクルの不可欠な要素であり、若者は ACT for Youth の経験豊かなピアトレーナーとして評価・調査に参加する。
高い(High)	若者は調査デザイン、データ収集と分析に参加する。改革を実行しその結果を報告する。
やや高い(Medium-High)	若者は調査ツールをデザインし管理をする。評価者は改革を実行し発展させ、その結果を分析する。
やや低い(Medium-Low)	若者は評価プロセスにおけるインプットを提供する。
低い(Low)	若者がデータを収集する。
かなり低い(Very Low)	評価者が若者から情報を収集する。
なし(None)	外部評価者は若者から直接、情報を集めないで調査を実施する。

参加型評価の実践事例 若者ホームレスへの適用 (Homeless Youth Study Team)

参加型評価の実践事例について Jane 博士がリーダーとなって実施している若者ホームレス研究チームとの意見交換を行った。このプロジェクトは 2002 年にトンプキンス群 (イサカ市を中心とするニューヨーク州中央部西に位置する) の地域の若者に対してアウトリーチを行っている The Learning Web から Jane 博士へのアプローチから始まった。当初、ニューヨーク州が行った調査では若者ホームレスは存在しないとの調査結果に対して、実際に若者ホームレス支援を行っている The Learning Web が調査を依頼したのである。最初は、若者と共にという姿勢ではあったが彼らに技術を教えることに重点を置いていた、しかし、実際にどうやって若者のニーズを調査できるのかと議論を重ねた結果、若者の助けが必要であり評価プロセスに若者を入れるべきだというアイデアに至った。「若者ホームレスは存在しない」という州の調査結果に対して「本当にそうだろうか、見つけられていないだけではないか」という疑問を解明できるのは、若者の問題についてよく知っている若者 (元・現ホームレスの当事者) に調査をしてもらうことでリアルなデータを収集できるということにシフトを変えたのである。国や行政が用意しているシェルターに若者がいないのは、ホームレスの若者の多くは大人からひどい目にあっ

ていて大人を信用していないからである。若者との信頼関係をどう築くかというよりも、若者がその問題を良く知っているということを尊重することが重要なのである。形骸化した調査のための調査ではなく、若者が若者支援プログラムのスタッフと協働することで同時にプログラム改善へと反映できることが最大の目的である。

若者ホームレスとの参加型評価のプロセスは次の通りである。若者（The Learning Web）と研究チームが協働で質問項目を作成、The Learning Web プログラムの利用者からインタビュアーがノミネートされ、研究チームによってインタビューのトレーニングが行われる、インタビュアーに質問用紙を配布し調査を依頼、インタビュアーは調査票一部につき 6 ドルの報酬と無料サンドイッチ券、インタビュアーは無料サンドイッチ券がもらえる、The Learning Web スタッフ（以下プログラムスタッフ）が質問用紙の回収とチェックを行い研究チームに提出、データを解析しプログラムスタッフと議論を重ねる調査方法などの修正を行う、得られた結果はプログラム改善に反映（若者のニーズを把握したもの）。新たなインタビュアーを発掘しトレーニングを行い調査に巻き込んでいく。

若者ホームレスの参加型評価がもたらす効果の一つはコミュニティがこの問題に気づいてくれたことで、ニーズに即したサービス提供の必要性が行政サイドに届くことができることである。もう一つの効果は若者のエンパワメントである。最初はとてもシャイだった若者がリサーチアシスタントとしてインタビュアーを行うようになることで、プログラムに対して自分が貢献しているという自信が生まれ、最終的には評価結果を堂々と関係者の前で発表できるようになるまでになった。社会スキル、スピーキング、大人との関係の取り方、若者同士の関係性のあり方など、評価プロセスに参加することによって多くのことを学習しているということである。

（２）対話（ダイアログ）活用事例の実施調査

今回の訪問調査先は多種多様であり、それぞれの訪問調査ごとの報告はここでは割愛するが、大きく分けるとフィンランドで様々な活動に対話（ダイアログ）を取り入れた先駆者から見た背景と動向、子どもから大人まで日常における対話の重要性に分類できる。

対話（ダイアログ）導入の背景と動向

オープンダイアログは 1980 年代フィンランドの西ラップランドにあるケロプタス病院で開発された包括的精神医療アプローチである。精神病と診断した人々を薬物と入院によって治療する伝統的精神保健アプローチに代わって行われたものである。治療や決定のプロセスには対象者・家族・社会的ネットワークが参加し、当事者がいる場面でそれぞれの見解や考えがオープンに語られる。つまり、当事者がいないところで当事者のことは話し合わないということが徹底された。全ての人々が平場の関係でお互いの声を聴きあい尊重するという、この取組みによって、多くの精神病と診断された人々がリカバリーを獲得している。

日常における対話の重要性

精神医療から始まったダイアログ活用はその後、行政機関、教育機関、保育機関、福祉領域などにも適用されるようになった。訪問調査の 1 つであるケミ市クライシスセンターでは、日常のささいな心配ごとから精神症状の重篤なクライシス状態まで、誰でも（市民以外でも）気軽に話を聞いてもらうことができる。フィンランドのダイアログは、今では、治療や支援という枠を超えて日常生活の中に対立ではなくダイアログを取り入れていこうとする取組みに切り替えている。

（３）若者支援関係者の参加型評価

第 1 回参加型評価（ロジックモデルの作成）

2022 年 2 月 20 日 参加者 12 名

参加者全員が参加型評価は初めてだったので、参加型評価は対話に基づく評価であること、評価者と評価を受ける側の構造ではなく評価者はあくまでもファシリテーターの役割であること、安心の場をつくるためにお互い尊重しあうこと、評価は価値の発見であることなどを説明した。平成 17 年（2005）からの活動を振り返る作業は大変ではあったがロジックモデルの流れに従って付箋をホワイトボードに貼っていく作業を行った。確認しないとわからない情報は後で送ってもらうこととしてロジックモデルのリソースを出すことができた。参加者の感想をアンケートでとったが、「ふりかえるいい機会であった」「未来が見える感じがする」という意見が多く出された。図 1 は評価者が作成し第 2 回の参加型評価で共有したものである。

第 2 回参加型評価（ロジックモデルの共有と今後について）

2024 年 2 月 18 日 参加者 15 名

第 1 回で作成されたロジックモデルをあらためて共有し、その後、小さなグループごとにわかれて対話を行った。その後、それぞれの思いを付箋に記入してもらい、ホワイトボードで共有した。その結果、今後、テーマにしたいこと、話合いたいこととして、居場所：子どもの居場所、マロウドの会の居場所、運営について、子ども、当事者の理解、子どもと親の関係にカテ

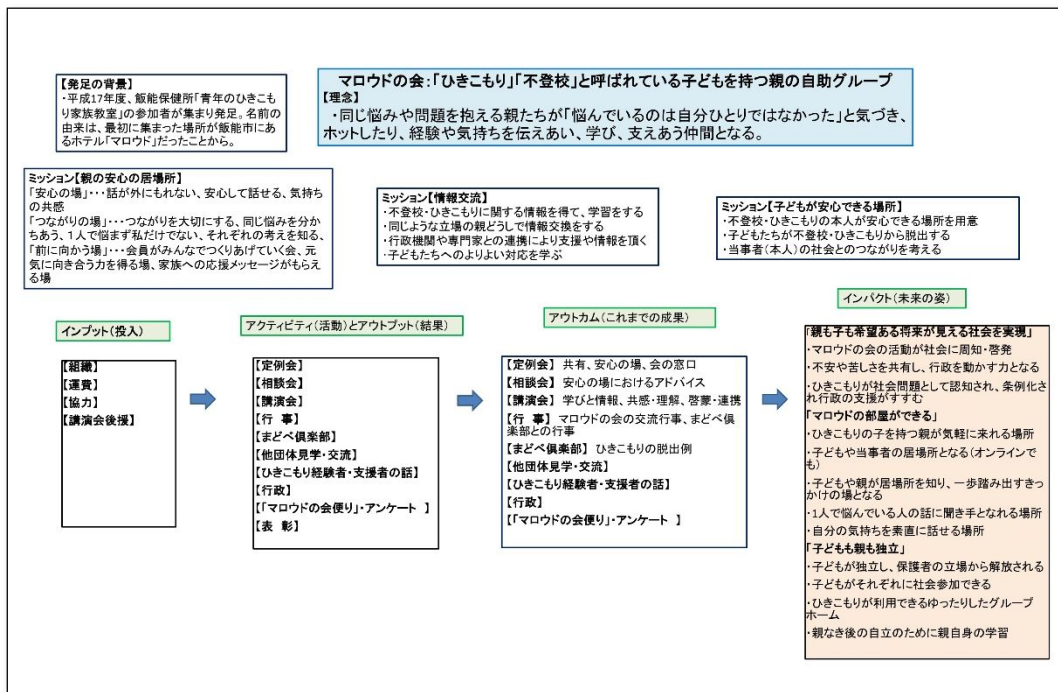
ゴリー化された。表2

参加型評価が大切にしている「対話」を意識したグループディスカッションとなり、アンケート結果では「話を聴くことの大切さがわかった」「声を出していいということがわかった」という意見が出されていた。また、ひきこもりの子どもの居場所を求めることが多くニーズの高さを改めて実感した。

表2. 今後、話合いたいこと

居場所	【子どもの居場所】・子どもが集える場・子どもが安心して話せる場所・心を許せる場所・子どもの集える場をどうかくホしたらいいか・当事者、子どもが安心して過ごせる場所づくり・まどべの居場所づくりを！ 安心して参加できる場所・子ども達、当事者も参加できるライングループ（自由に参加、退室ができる場）・楽しみながら社会参加できる場ができれば（畑の手伝いなど）・ひきこもりが利用できるグループホームの見学会・ひきこもり当事者の居場所の紹介 【マロウドの会の居場所】・マロウドの会の居場所を作りたい・いつでも参加して、自由に話せる場
運営	・会員一人ひとりの意見をくみ取る会にするためにはどうすれば・会に参加できない（されない）人への取り組み・ひきこもり支援の行政への働きかけ・役員も年をとって来ているので、これからの会の運営をどうするか・気軽にいろいろな人が参加できるフリーマーケットをしたい・マロウドの会 20 周年イベント！何をしましょう？
子ども・当事者の理解	・ひきこもり経験者の話を聞く・子ども（ひきこもり）の話を聞く機会・ゲーム依存から立ち直った人の話を聞いてみたい・子どもが外に興味を見つけるようなアドバイス、体験談や話を聞きたい・子どもの社会性、人との会話、家族以外の人と関わりができるためにはどうすればいいか・「不登校」「ひきこもり」と呼ばれる子どもが、そういう状態になった問題を提起してもらい、自分だったらどう対処するのかを考え、それをもとに交流する
子どもと親の関係、これから	・家庭の中での自分のあり方・価値観の変化についていけません、親世代の常識と子世代の常識、どう埋めれば良いのでしょうか。8050 問題が心配です・親が楽しんで幸せを追求できる活動を話し合い、実行したい・上手なコミュニケーションの取り方を教えて下さい・ファイナンシャルプランナー（親と子どものこれから）の学習会・ひきこもり支援の利用の仕方を共有する

図1. マロウドの会ロジックモデル（インプット、アクティビティ、アウトプット、アウトカムの詳細は省略）



（4）まとめ

参加型評価アプローチは平場の関係における「対話」をベースとした評価であり、その評価プロセスに関係者が参加するというものである。若者支援の場において参加型評価アプローチを適用することで若者主体のプログラム実践が可能であることが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤島薫	4. 巻 第5巻
2. 論文標題 若者自身の解決する力に焦点をあてた参加型評価の実際 - Assets Coming Together or Youth Center の訪問調査から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環境福祉学研究	6. 最初と最後の頁 111 - 117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤島薫	4. 巻 第6巻
2. 論文標題 若者のメンタルヘルスと支援 - 中学校・高等学校におけるアンケート調査から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境福祉学会	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤島薫	
2. 発表標題 中学校・高等学校におけるメンタルヘルスの課題に対する支援状況から参加型評価アプローチによる支援の検討	
3. 学会等名 日本精神保健予防学会	
4. 発表年 2018年	

1. 発表者名 藤島薫	
2. 発表標題 若者のストレスに焦点をあてた参加型評価アプローチによる支援	
3. 学会等名 日本環境福祉学会	
4. 発表年 2017年	

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------